

**製品名: PYK2 ウサギポリクローナル抗体**

**カタログ番号: APRab16716**

研究使用のみ

## 概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	WB,IHC,ICC/IF,ELISA
反応性	人間、マウス、ラット、サル
標識	非共役
修飾	未修正
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

## 応用

希釈倍率	WB 1:500-1:2000,IHC 1:100-1:300,ICC/IF 1:50-1:200,ELISA 1:5000-1:20000
分子量	115kDa

## 抗原情報

遺伝子名	PTK2B PTK2B; FAK2; PYK2; RAFTK; Protein-tyrosine kinase 2-beta; Calcium-dependent tyrosine kinase; CADTK; Calcium-regulated non-receptor proline-rich tyrosine kinase; Cell adhesion kinase beta; CAK-beta; CAKB; Focal adhesion kinase 2; FADK 2; Pro
別名	
遺伝子 ID	2185.0
SwissProt ID	Q14289
免疫原	抗血清はヒト PYK2 由来の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 546-595

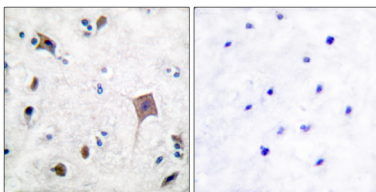
## 背景

この遺伝子は、カルシウム誘導性イオンチャネル調節および MAP キナーゼシグナル伝達経路の活性化に関与する細胞質タンパク質チロシンキナーゼをコードしています。コードされているタンパク質は、カルシウムフラックスを増加させる神経ペプチド活性化受容体または神経伝達物質と、神経活動を制御する下流シグナルとの間の重要なシグナル伝達媒介として機能する可能性があります。コードされているタンパク質は、細胞内カルシウム濃度の上昇、ニコチン性アセチルコリン受容体の活性化、膜脱分極、またはプロテインキナーゼ C の活性化にตอบสนองして、迅速なチロシンリン酸化および活性化を受けます。このタンパク質は、CRK 関連基質、ネフロシスチン、FAK 関連 GTPase 調節因子、および GRB2 の SH2 ドメインに結合することが示されている。コードされたタンパク質は、タンパク質チロシンキナーゼの FAK サブファミリーのメンバーですが、触媒活性において顕著な配列相同性がありません:  $ATP + a$  [タンパク質]-L-チロシン =  $ADP + a$  [タンパク質]-L-チロシンリン酸。機能: カルシウム誘導性イオンチャネル調節および MAP キナーゼシグナル伝達経路の活性化に関与します。カルシウムフラックスを増加させる神経ペプチド活性化受容体または神経伝達物質と、神経活動を制御する下流シグナルとの間の重要なシグナル伝達中間体である可能性があります。Grb2 の SH2 ドメインと相互作用します。電位依存性カリウムチャネルタンパク質 Kv1.2 をリン酸化する可能性があります。その活性化は、c-Jun N 末端キナーゼ活性の刺激と高い相関性があります。浸透圧ストレス依存性 SNCA [Tyr-125] リン酸化に関与する。PTM: 細胞内カルシウム濃度を上昇させる様々な刺激や PKC 活性化に反応して、チロシン残基がリン酸化される。ネフロシスチンが細胞マトリックス接着層にリクルートすることで、Tyr-402 のリン酸化が開始される。単球では、基質への接着がチロシンリン酸化とキナーゼ活性化に必要である。アンジオテンシン II、タブシガルギン、L- $\alpha$ -リゾホスファチジン酸 (LPA) も自己リン酸化を誘導し、キナーゼ活性を高める。類似性: タンパク質キナーゼスーパーファミリーに属する。Tyr タンパク質キナーゼファミリー。類似性: タンパク質キナーゼスーパーファミリーに属する。Tyr タンパク質キナーゼファミリー。FAK サブファミリー。類似性: 1 つの FERM ドメインを含む。類似性: 1 つのタンパク質キナーゼドメインを含む。細胞内局在: ネフロシスチンとの相互作用により、キナーゼの膜への会合が誘導される。サブユニット: Crk 関連基質 (Cas)、PTPNS1、および SH2D3C と相互作用する (類似性による)。ネフロシスチン、ASAP2、OPHN1L、SKAP2、および TGFB1I1 と相互作用する。組織特異性: 脳に最も多く存在し、扁桃体と海馬に最も多く存在する。腎臓では低レベルである。脾臓とリンパ球にも発現する。、

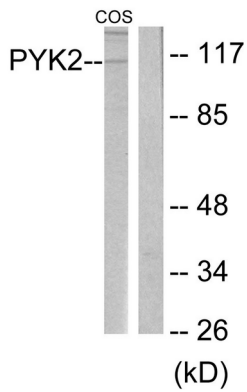
## 研究分野

カルシウム、ケモカイン、ナチュラルキラー細胞を介した細胞傷害、白血球の内皮透過性遊走、GnRH、

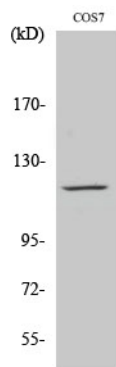
## 画像データ



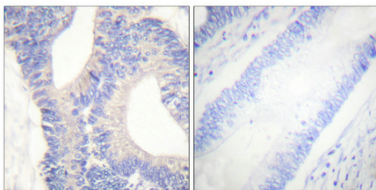
PYK2 抗体を用いたパラフィン包埋ヒト脳組織の免疫組織化学染色。右の写真は合成ペプチドでブロッキングした状態。



UV 15°処理した COS 細胞ライセートの PYK2 抗体を用いたウェスタンブロット解析。右レーンは合成ペプチドでブロッキングされている。



PYK2 ポリクローナル抗体を用いた様々な細胞のウェスタンブロット解析



パラフィン包埋ヒト大腸癌の免疫組織化学染色。抗体は 1:100 (4°C、一晚) に希釈した。抗原賦活化には、高圧高温トリス EDTA (pH8.0) を使用した。抗体から得られたネガティブコントロール (右) は、免疫原ペプチドで前処理した。